カントー私立ポケモン学園

ジャガイモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カントー私立ポケモン学園

【Ｎコード】

Ｎ８４８０Ｗ

【作者名】

ジャガイモ

【あらすじ】

この話は一匹のピカチュウが『カントー私立ポケモン学園』の中での学園生活であり、ギャグ連発、ボケ連発、笑い連発とさまざまなことがおきる物語である。

第1話　プロローグ（前書き）

はい！　第一話です。
ポケ夢と同じ感じがしますが気にしないでください。
それではスタートです。

第1話　プロローグ

ジリリリリリリ……。

部屋に目覚まし時計の音が鳴り響く。それを、一匹のポケモンがとめる。

そのポケモンは全体的に黄色く、背中にシマシマ模様さらに大きな尻尾もある。

そのポケモンの名前をピカチュウという。

「ふあぁぁ～。今何時だ？」

ピカチュウは時計を見る。針は8時を回っていた。

「ヤバイ！　遅刻する！」

今日はカントー私立ポケモン学園の入学式がある。ピカチュウも今日からその学校の生徒になる。

カントー私立ポケモン学園とは、一番最初のポケモン学校である。学校自体は普通だが、毎年入学生徒が多く部活動も活発になっているので入学率がとても高い。

そう話しているとピカチュウは準備を終え、家を出ようとしていた。

「じゃあいってくるね」

「気をつけてね」

ピカチュウは母に声をかけ、家を出た。

これから、ピカチュウの学園生活が今、始まる。

第1話　プロローグ（後書き）

最初なので、こんな感じだと思います。

次回から大爆笑の物語がスタートします。

ピカチュウ「本当かよ」

まぁご期待ください！

それでは～♪

第2話　入学式と自己紹介（前書き）

はい！　第2話です。

ピカチュウ「この小説何話まで続くのかな～？」

そんなことより、ピカチュウ時間は？

ピカチュウ「あっ！　もうすぐ入学式だ急がなくては！」

待て！　あーあ行っちゃったよ……。

ではどうぞ！

第2話　入学式と自己紹介

ピカチュウは全速力で走っていった。すると、前に一匹のポケモンがいた。

「あっ！　ロコン」

ピカチュウは体は全体的に赤色で、尻尾は6本に分かれているポケモンロコンと出会った。ピカチュウは彼女とは幼馴染である。

「ピカチュウ君、おはよう」

ロコンはピカチュウに挨拶をした。

「こんなにゆっくり歩いていいの？」

ピカチュウはロコンに聞く。

「えっ！　知らないの？入学式は１０時からよ」

ロコンはきちんと答えた。

「どうして1時間ずれたの？」

本来は9時から入学式が始まる予定で入学生は8時半に学校に集合するはずだった。

「なんか校長先生が気分的に１０時がいいんだって」

「なんじゃそりゃ～！」

ピカチュウは叫んだ。

「まず、気分て何？そんなんで校長務まるの？それはおかしいだろ」

「あーあまたでたよピカチュウ君の突込み癖」

ピカチュウはとにかく突っ込めることはとことんと突っ込む癖がよく出る。

そうしばらく話していると学校に着いた。

「ここがポケモン学園か～」

ピカチュウは学園全体を見る。

全体的に校舎は綺麗でまるで最近できたばかりの校舎に見えてきた。

「えーとクラスは同じ４組だよ」

ロコンがそういう。

「本当だよかったこれからもよろしくね」

「うん」

二人はそういい、教室へと入っていく。

「ここが１年４組か～」

ピカチュウたちは中に入る。教室は汚くはないが綺麗というまでで

もない。とりあえず、教卓へいき、席を確認した。

「席は……あそこだ！」

ピカチュウが指をさした席は教卓の目の前の席だった。

「さす必要もなかったんじゃない？」

「……そうでしたね～」

ピカチュウは少し唖然した。

キーンコーンカーンコーン……

学校のチャイムが急になり始めた。

ピカチュウたちは急いで席に座るロコンはピカチュウの席から3つ後ろの席に座った。

「おーい。席に座れ～」

すると、担任の先生らしきポケモンがきた。体には甲羅があり、肩にはキャノン砲があるポケモンカメックスだ。

「えーと今日からこの一年3組の担任になるカメックスだ。教える科目は体育みんなよろしく」

カメックスはきちんとあいさつする。

「あの～先生」

「リオル、何だ？」
ピカチュウの隣にいるポケモンが質問した。体は全体的に水色でリオルと呼ばれているらしい。
「ここって1年4組なんですけど……」
「本当か？」
「はい」
それを聞くとカメックスは急いで教室を出て行った。ピカチュウはどうにか突っ込みをこらえた。
そして、本当の担任が来た。
「うーす。今日から1年4組担任のリザードンだ。担当教科はポケモン学だ。これから1年よろしく」
リザードンは全体的にオレンジ色で尻尾には炎が燃え盛っている。ちなみにポケモン学とは、ポケモンの神話や伝説を中心に固体値や努力値などポケモンについての知識を勉強する。
「んじゃあこれから入学式が始まるから、適当に並んで体育館に行って来い」
リザードンにいわれるまま適当に並び、体育館に向かった。
「えーこれからカントー私立ポケモン学園の入学式を始めるでざます」

そういうのは副校長のペルシアンだ。体は白い毛に覆われている。

「最初は校長先生の話ざます」

なんかざます、ざます聞いてるとむかついてくるが副校長のためそれをいったら退学になりかねないからまたこらえた。

そしてゆっくりと教壇にあがってくる校長先生ちなみに種族はヤドランだ。そしてマイクをもって話し始めた。

「皆さんこんにちは。えーっとわしは……誰じゃっけ？」

ヤドランがそういうと、生徒の大半以上がズコーとなり、先生までもがなりかけた。

「校長これを」

ペルシアンが1枚の紙を渡す。

ヤドランはとりあえずその紙を読む。

「皆さんこんにちは。私がこの学園の校長のヤドランです。皆さんたちがどんな学園生活を遅れるか心配ですが、その1日1日を大切にしてください」

生徒たちは唖然としながらも拍手を送った。

「こほんでは、次に生徒会長の話ざます」

すると、生徒会長が教壇にのぼりマイクをもった。

「皆さんこんにちは。私が生徒会長のミュウツーです。我々生徒会は学園に役立つことを主に活動しています。皆さんも生徒会役員に会ったら要望や疑問を教えてください。すぐに検討し、できるだけ早く実行しますのでよろしくお願いします。」

ここはなにもなく拍手がでた。

「それではこれで、入学式は終わりざます。あとは各教室で授業に必要なものなどを渡しますので一度教室にもどるざます」

ペルシアンに言われた通りに教室に戻った。

「じゃあ自己紹介してもらおうか」

リザードンがそういう。

「窓側から初めてくれ話すのは名前、特技だけでいいぞ」

「えっとビリリダマです。特技は大爆発です」

「ジュペッタです。特技は空気化です」
「ちょ、空気化って」
ピカチュウが突っ込むがしかし、自己紹介は続く。
「コイキングです。特技ははねることです」
「先生、ちょっと待ってください」
ピカチュウが立ち上がる。
「ん？なんだピカチュウ」
リザードンが欠伸をしながらピカチュウに聞く。
「ここ、すごい個性的過ぎませんか」
「だって普通そういうもんだろ？」
「ちょ……そういうもんてものにもほどがあるでしょう？」
「じゃあ個性はなくていいのかよそんなこといったらお前の突っ込みも禁止にすっぞ」
「すいませんでした」
「「誤るの早っ！」」

いつもは突っ込むピカチュウも今日は素直に謝った。

「んじゃ続けて」

「ラティアスです。特技は特にないけどよろしくね♪」

「え、えっとロコンです。……特技はないですけど、よろしくお願いします」

ロコンは緊張したのか席に戻るときほっとしながら戻っていった。そして後ろのラティアスもよろしく～♪と挨拶をして、友達になった。そしてピカチュウの番がきた。

「……ピカチュウです。特技は特にありまs」

「嘘だろじゃあその突っ込みはなんだ？」

「うっ！」

リザードンが突っ込む。

「先生すごい」

「えっ、何で？」

ロコンがの呟きにラティアスが聞き、ロコンに質問した。

「ピカチュウ君の突っ込みはおそらく一番を取れる力があるのに先生はそれをいともたやすく言葉を返す。普通は返すことなんてできないレベルなのに……」

「そうなんだ♪」

ラティアスは軽く驚きながらも、普通に答える。

「……特技は……突っ込みです。」

「よし、よく言えた」

リザードンは軽くほめる。ピカチュウはどよーんとしながら席に戻る。

「じゃあ次」

しかし、まったくピカチュウには関心がなかった。

「リオルです。特技は波導をコントロールすることができることです」

「それって、普通のリオルと同じなんZ」

「「お前は一回黙れ！」」

「ひっ！　…すいませんでした」

ピカチュウは周りの人から怒られ、しばらく黙った。いつ泣くかわからない状態になった。

「あれはちょっとかわいそうじゃない？」

「いや大丈夫。あんなになっても、明日にはまた元気になるから」

「へぇ～」

そして次々と紹介が終わり、色々と学校で必要なものを配られ学校は終わった。

放課後

「はぁ～今日は散々だった～」

ピカチュウはどよーんとしたムードがまだ続いていた。ロコンはラティアスと先に帰った。

「あっ！　ピカチュウ君」

ピカチュウは声がしたほうに振り向いた。すると、リオルがいた。

「ん？どうしたのリオル君？」

ピカチュウがリオルに聞く。

「あのさ、僕と友達になろうよ」

リオルは普通に誘った。

「え、いいよ」

「さらっといったね～」

本当にさらっとである。

「でも、僕以外にも友達いるでしょ？」

ピカチュウはそうリオルに聞く。

「もちろんいるよだって君といると、楽しい空気になるんだよ」

ピカチュウにとってリオルの答えは意外だった。

「じゃあこれからよろしくね」

「こちらこそよろしく！」

こうしてピカチュウに新しい友達ができた。

第2話　入学式と自己紹介（後書き）

はい！　やっと終わりました～。
ピカチュウ「担任が御三家しかいないじゃん」
今のところはね。
ピカチュウ「今のとこって」
じゃあ今回はここらで
ピカチュウ「あっ！　逃げるな！」
それでは～♪
ジャガイモは逃げ出した。
ピカチュウ「あっ！　待て！」

第3話　部活動はどこに入る？（前書き）

はい！　3話目です。

ピカチュウ「更新が早いね～」

書いてると楽しいからね。

ピカチュウ「レオン先輩あたりに聞かれたらまずいっすね」

うん。

それではどうぞ！

第3話　部活動はどこに入る？

入学式から1週間後

「部活動？」

ピカチュウは首を傾げた。

「ピカチュウ君ってどこに入るの？」

リオルに聞かれた。

「うーん帰宅部？」

リオルはそれを聞いた瞬間それで良いのかと思った。

「本当に部活やらないの？」

「本当にやらない」

ピカチュウは即答した。

「と、とりあえず部活動体験に行かない？」

「……部活動体験？まぁ暇だからいこうかなぁ～」

「本当にやったー」

リオルがなぜか喜んでいる。

「んで、とりあえずどこから行くの？」

「それを決めてなかった。」

リオルはするっと答えた。

「ねぇ、こういうのを聞くのは悪いと思うんだけど君って馬鹿？まず、それを決めてから人をさそうでしょう」

すこし、毒舌が入った。

「ご、ごめんね。とりあえず、全部活回ろうか」

「それでいいよ」

ピカチュウはそれでｏｋしたようだ。

「じゃあ水泳部から」

「何で！？」

「近くにあったから」

ピカチュウは目を見ると、水泳部の部室があった。

「えーとなになに水泳部、１００m自由形1分３０秒を切ってない方はお断りだって」

「まず、タイム以外に規制がないってどういうことだよ」

「まぁそういう部活なんだろうね」

泳ぎ方は基本的に人間界のものと同じだ。１００m自由形を1分３０秒はおそらく作者でも無理であろう。

「もういい。次のところに行こう。」

「そうだね」

「次は科学部か～」

「とりあえず中に入ろう」

リオルたちは中に入った。

「ではまず、マグネシウムとカルシウムをこの液体にいれてくださーい」

これを聞いた瞬間リオルたちはドアを閉めた。

「っていうかどうやってカルシウム取るんだよ！」

ピカチュウは一人で突っ込みを入れた。

「まぁ、この牛乳を飲んで落ち着いて」

「う、うん」

ピカチュウは牛乳を飲んだ。

「ぷはーってこれは確かにカルシウムとっているよ、でも体内じゃん！」

ピカチュウは微妙な乗り突っ込みをした。

「……次行こうか」

「そうだね」

「ここは？」

「ここは囲碁・将棋部だよ」

ピカチュウたちは中に入る。

「あっ、部活体験の人？囲碁・将棋部へようこそ！僕は部長のナマケモノです」

「おっ、ここは結構まじめだぞ」

ピカチュウはそう思った。しかし、囲碁・将棋どころか部をやっているかわからない状態になっていた。

「で、あなたたちはここで何をしているんですか？」

「ここでぐーたらしたり、遊んだりしているよ」

「まじめだと思った僕が馬鹿だった」

ピカチュウはそう思った。

「つ、次行こうか」

「次は何？」

「吹奏楽部だよ」

「吹奏楽ねぇ～あっロコンとラティアスだ！」

「あっ！　ピカチュウ君」

「やっほー」

二人はピカチュウたちに軽い挨拶をした。

「二人とも、吹奏楽部の体験？」

「そうだよ～♪」

ラティアスが軽く答える。

「んで二人は何してるの？」

ロコンが聞いた。

「同じく体験」

「ピカチュウが音楽？まさかやるわけないでしょう」

「え、なんでそんなこと決めるんだよ」

「だって音楽興味ないじゃん」

「うっ……」

ピカチュウはロコンに痛いところを突かれた。
「そこから抵抗できないんだね～♪」
「……」
「まぁまぁ、人にはその人だけのいいことがあるし」
「なんか酷い言い方のように聞こえてきたぞ」
ピカチュウは軽く抵抗した。
「まぁその辺はいいけど、じゃあがんばってねー」
ロコンたちはそのまま部活動体験を続けた。
「まぁいいか次行こう」

「次は……空気部？」
ピカチュウは空気部の部室の中に入っていった。

「あれ、だれもいない」

ピカチュウはあたりを見渡すが、誰もその教室にはいないはずなのだが、なぜか気配が微妙に感じる。

「こんにちは～。空気部部長のゲンガーでーす」

「うわぁ！」

ピカチュウたちは驚いた。

「ここはね、空気を消す練習ができるんだー」

「そんなのいりませんよ！　っていうかなんでそんな部活があるんですか？」

ピカチュウは敬語で突っ込んだ。

「僕たちが作った」

そういうと、ピカチュウたちは「なんかアホだろこの部活」と思った。気づくと、ジュッペッタまでいる。

まぁ空気化が好きって言ってたもんな～。ピカチュウたちはその教室からでた。

2時間後

「次はどこ〜？そろそろ疲れてきたよ」

「ここが最後だ」

「えーっとお笑い部？何じゃそりゃ」

「と、とりあえず中に入ろう」

中に入った。

「どうもー○ッギョでーす」

「ちょっと待ったー！　そこ○しなくても良いでしょう。同じポケモンネタなんだから」

「ちょっと最後のほうが言いすぎだと思うんですけどー」

「合格！」

「え？　合格って」

「このお笑い部に入る権利だよあっ！俺は部長のマッギョな」

マッギョはそういった。

「そこのピカチュウはこの部活に入る権利があるよー」

「まじで言ってるんですか？」
「まじだよ突込みの天才君」
「て、天才って言われちゃったらなぁ～」
ピカチュウは照れた。
「んじゃどうする、入る？」
「うーん」
ピカチュウは考えた。入れるのは一人一つ。ここにはいれば別の場所をあきらめなくてはならない。
「じゃあやめておきます」
「まじでいってるの？」
「はい」
「ピカチュウ君まじめに言ってるの？」
「そうか…じゃあな俺の相棒」
「ちょ、いつの間に相棒になってるの！」
「はぁ～入ってくれないのか～悲しいな～」
「そんなことを言ってもはいりませんよ」

「そうかここに入れば、伝説の突っ込みを教えらるんだがな～」
それを聞くと、ピカチュウはすぐに戻ってきた。
「はいります！　よろしくお願いします！」
「うむよかろう」
「あーなんかだまされているような気がするなー」
リオルはピカチュウをおいて、吹奏楽部のところへ行き入部届けを出した。どうやら、ロコンとラティアスも吹奏楽部に入ったようだ。
ピカチュウは結局お笑い部に入り、伝説の突込みを教えてもらうのは2年後の話であった。

次の日

「ん？何かあるぞ」

ピカチュウは学校でひとつの記事に目がいった。
それはなんと、ピカチュウのことが書いてあった。

その新聞の名を『新聞部新聞４月号』とかかれ、学校中に貼られているようだ。
その内容は『お笑い部に突っ込みの王出現！？』という見出しで出されていた。
このことで、大体の生徒にピカチュウのことが知られ、話の題材になったり、噂が流れたりするようになった。

ピカチュウはそんなことより、全部活の顧問の先生のほうが知りたいらしい。

そして、ここからピカチュウの突っ込み王としての成長が今はじまる。

第3話　部活動はどこに入る？（後書き）

はい！　今回は長からず短からずって感じです。
ピカチュウ「この新聞って番外編で出す？」
まぁ基本そうなります。
ピカチュウ「……本当にやるの？」
まじめに。では今回はここらで
それでは～♪

第４話　リオル君のお家はどこですか？（前書き）

はい！　ポケ夢でも珍しくない『～ですか？』シリーズをまさかのカントー学園でもやることになっちゃいました。

ピカチュウ「それって、タイトルネタがないんだろ」

その通りでーす。

ピカチュウ「そこ元気よく言うな！」

それではどうぞ！

第4話　リオル君のお家はどこですか？

入学式から2週間たった。

1年4組の生徒は全体的に仲良くなった。ピカチュウもまたいろんな人と友達になった。

おそらく理由としてはあの新聞の記事をみてだろうな。

～教室～

「あっ！　ピカチュウ君いいところいた」

ロコンがピカチュウを呼んだラティアスも一緒にいる。あの二人はこの3週間で互いを信じれる仲になったらしい。

「ねぇそろそろその君付けやめない？幼馴染なんだし」

ピカチュウはロコンに聞く。

「え？だめなの？」

「だめではないけど…」

「じゃあいいじゃん♪」

「う～……」

ロコンはするっと答え、ピカチュウはなぜか悔しさを感じた。

「それよりどうしたの？」
ピカチュウがロコンに聞く。
「ああ、そうそう！　あのさ、リオル君の家ってさ興味ない？」
「興味を持つと思う？この『突っ込み王』が」
ピカチュウは自慢げにそういった。結局『突っ込み王』というのは認めたらしい。
「そういうと思った」
「……」
ピカチュウはさらに悔しさを覚えたのか、とうとうしゃべらなくなった。
「ようするに、ロコンちゃんが言いたいのは噂だとリオル君の家は誰も行った事がないんだって！　さらにあんなにカッコイイじゃん。さらにロコンちゃんはリオル君のことが……」
「それは言っちゃだめーーー！」
ロコンは必死にラティアスを止めた。
「……簡単に言うと、僕に尾行しろと」
「その通りです。賞金も出ます！」

ロコンは簡潔に言った。

「ねぇ、なんで僕に頼むの？」

「だってピカチュウ君しか頼む人がないから。それと、金に目がくらむかな～って」

「それはさすがにない。どっかの作者でもないし」

ピカチュウは普通に断った。

「じゃあ今後私はピカチュウ君を呼ぶとき、君付けしないから」

ロコンはそれを条件にピカチュウにお願いした。

「うーん。……いいよただし金もね」

ピカチュウはＯＫした。

「結局金に目がくらんだね～」

「そ、そういうわけじゃなくてこの金は雇うために使うんだよ」

「雇う？　誰を？」

ラティアスは疑問に思う。

「決まっているさ！　おーいジュペッタ君」

ピカチュウはジュペッタを呼んだ。幸い近くにいたため声が聞こえ

たらしくピカチュウの前に来た。

「はーい用件は何～？」

ジュペッタはピカチュウに聞く。

「君にリオル君の尾行をお願いしたい」

ピカチュウは用件を言った。

「うん～いいよ～。ただし、お金ちょ～だい！」

ジュペッタは金を要求したがピカチュウは「それは任務が終了したらあげる」といい、後払いにさせた。
そうすると、ジュペッタは「わかった～」といい、ビデオカメラを持ち、ちょうど出て行くリオルを尾行し始めた。

「よし、後は明日ビデオの内容を見ればいいはずだ。これでいいだろ？」

ピカチュウは欠伸をしながらロコンに聞く。

「それでいいわ。じゃあね！　ピカチュウ」

「まったね～」

ロコンとラティアスはそのまま教室を出た。

「あっ！　お金……しゃーない僕も帰るか」

そういいピカチュウは教室を出た。

〜翌日〜

「何！　破壊されただと！」

ピカチュウは教室で叫んだ。どうやら、リオルにカメラを壊されたようだ。

「うん。空気になる力が足りなかったのかな〜」

「空気になる力？」

ピカチュウは首をかしげた。

「空気になる力は影が薄くなればなるほど、力が上がるんだよ。ちなみに尾行中は3割くらいだよ」

「へぇ…ってかどうすれば影が薄くなるの？しかも尾行中に3割っていつもは何割なの？ねぇ、何割なの？」

ピカチュウは完全に突っ込んだ。

「うーんとね、いつもは2割くらいかな」

ジュペッタが答える。

「ていうかなんで10割で行かないんだよ！　普通そうだろ！」

「うーんとね、10割を使うとね本当に僕がいなくなったことにな

るのと同じだから、使うのは個人的に禁止にしてるんだ～。さらにね今以上いくと、間違えると僕の周りの人に忘れられちゃうから尾行に対してはこれが限界なんだ～ごめんね～」

「……そうなのか、せめてごめん」

ピカチュウは謝った。

「いいよ。僕のことを大切に思ってくれていれば」

ジュペッタはピカチュウを許した。

「あっ！　ピカチュウとジュペッタ君だ！」

そこにロコンが教室に入ってきた。

「で、どうだったの？」

「それが、失敗したってさ～。」

「ジュペッタ君の空気化でも、感づかれちゃうの！」

ロコンは少し驚いた。

「あ、それについては……」

ピカチュウはジュペッタのことを話した。最大限にすると彼がいなくなることと同じになること、強くすると周りが彼がいなかったことになること……。

「なるほどね。ありがとうねこんな人に話したくないこと話してくれて」

「うんいいんだ。何で本気を出さなかったのかわかってもらえば」

ジュペッタは、またもや軽く許してくれた。そこにラティアスがきた。

「おはよう」

「「おはようラティアスちゃん」」

「あっあたしは普通にラティアスでいいよ～♪」

ラティアスにそういわれ、ピカチュウ達は「わかりました～」という。

「しょうがない。最終手段だ！」

「「「最終手段！？」」」

「リオルを僕たちが尾行する」

ピカチュウにしては大胆な選択だ。

「ちょっと待った。上の描写なんだ？　僕はそこまで大胆じゃないぞ」

地味にメタ発言な気がするが、気にせず全員で尾行することにした。

～放課後～

リオルが教室を出る。

「いまだ！　行くよ」

ピカチュウ達も気づかれないようにリオルについていった。

リオルはゆっくりと歩いていく。ピカチュウ達もついていく。そして１つの建物に着いた。

「……すごい」

ロコンが呟く。大きさは学園と同じくらいで、まるで豪邸といっても過言はないであろう。

「あっ！　あれ見て」

ラティアスがいう。リオルが家の前で何かに触れた。

「おそらく指紋認証装置みたいなものだＺＥ！」

「おそらくはね……ねぇ、今誰が言った？」

ピカチュウがみんなに質問する。

「それは俺がいったのさ」

「！　誰だ！」

ピカチュウは後ろを向きいった。

「俺かーい？　俺は通りすがりのヒヒダルマだＺＥ！」

「うわーうざキャラっぽいのがきたよ」

ピカチュウはそういった。

「ちょっと待つんだｚｅ！　なんだそういう言い方をするのは失礼だＺＥ！」

ヒヒダルマはピカチュウに説教するような言い方で返した。

「へーい」

ピカチュウはだるそうに答えた。

「この～～～～～～！」

ヒヒダルマは怒った。

「まぁまぁ落ち着いてください。それに何か知ってるから話しかけてくれたんですよね？」

ロコンは親切に質問した。

「あ、……は、……はい！」

ヒヒダルマは照れながら答えた。このときラティアスは「この人恋してるね～」と呟いた。

「俺は何気に開発部でな、機械のことは大体のことはできるＺＥ！
例えばパソコンのハッキングとか……」

「ふーん」

ピカチュウは軽くうなずいた。

第３話では紹介していないが、ほかにも存在してていいのかと言えるレベルのものの部活もある。開発部はその間にある。

「あんな機械は普通に破壊することは可能だＺＥ！」

そういうと、ヒヒダルマは機械に近寄り、色々といじくり始めた。

「時間がかかりそうだね」

ロコンがそう呟く。

「ジュペッタ君が空気化してるよ」

ラティアスがそういう。ジュペッタはさっきからまったくしゃべってないので、全員に忘れられていたようだ。
しかし、彼いわく「これは空気化する特訓だよ～」といった。

「……これでよし！　これで通れるＺＥ！」

ピカチュウ達はそれを聞いた瞬間ヒヒダルマに「ありがとう」とい

い、さっそうと家の中に入っていった。

「ここがリオル君の家か～」

ピカチュウは呟く。

「ねぇアンナさん、しばらくしたら友達を読んでもいい？」

どこからかリオルの声が聞こえた。声が聞こえる部屋を見つけ、ドアに隠れ話を聞く。

「うーん、とりあえずご主人様に聞かないといけませんねぇ～」

リオルではない声が聞こえた。どうやらアンナさんというらしい。見る限り、種族はサーナイトのようだ。

「じゃあいつになる？」

リオルが聞く。

「ふふふもういますよ……出てきてください」

「……なんでバレたんですか？」

「！　ピカチュウ君にほかの皆も…」

リオルが驚く。

「私は波導を読む力があるんですよ」

「……波導！？」

ピカチュウ達も驚く。

「私は昔からこの家に昔から仕えていますので、波導の力を遺伝させてもらいました」

「ちょっと待ってください！　遺伝ってそこまでにいたるまでに何があったんですか？」

「それは秘密です」

「ですよね～」

ピカチュウはわかったような言い方で返事をした。

「遅れましたがわたくしはこの屋敷の執事のアンナと申します」

アンナはそういう。

「ちょっと待って、てことはリオル君は豪邸の一人息子～！？」

ロコンがそういう。

「そうだけど何か？」

リオルはあっさりと答える。

「ねぇ、そういえばなんで家の前にあった指紋認証装置で引っかからなかったの？」

リオルがピカチュウ達に聞く。

「そ、それは……」

「通りすがりの方が破壊してくれたんです～♪」

ラティアスが答える。

「そうですか…その方には弁償してもらいましょうかね～」

「ちょ、……アンナさん怖い怖い」

アンナからは禍々しいオーラを放っていることを感じた。

「まぁその方の件は置いといて、今日は遊んでもいいですよ」

「え！　いいの？」

「はい。ご主人様には黙っときますので」

「やったー！」

アンナはそういうとリオルが子供のようにはしゃいだ。

「じゃあこれから遊ぼうぜ！　何をして遊ぶ？」

「やっぱりここは大富豪をやろうＺＥ！」

「このしゃべり方は……アンナさん」

「何でしょうか？」

ピカチュウはアンナにいう。

「この人が指紋認証装置を壊した人です」

「そうですか。ではちょっとこっちにきてください」

「え！　俺が何をしたんだよー助けてぇ～！」

「じゃあ無視して大富豪をやろう！」

ピカチュウ達はヒヒダルマを無視し、大富豪を楽しんだ。

「今日はありがとうね～」

「またね～♪」

「また遊びに来てよ」

ピカチュウ達はリオルが見えなくなるまで手を振った。

「じゃあはい！」

ピカチュウはロコンに手を出す。

「え、何？」

「お金くださいな～」

ピカチュウはロコンに要求した。

「そんなの知らないわよ勝手に思い込まないでくれない？」

「酷い」

ピカチュウはロコンに一言言った。さらにジュペッタがピカチュウに向けて手を出した。

「え、何？」

「お金くださいな～」

ジュペッタはピカチュウに同じことを言った。

「……とほほ」

ピカチュウは後日ジュペッタにお金を払うことになった。

第４話　リオル君のお家はどこですか？（後書き）

ピカチュウ「あ～損した～」
ドンマイ♪
ピカチュウ「何が言いたいんだよ！」
そのまんま。
ピカチュウ「酷いな」
そんなこと知らん
ピカチュウ「……」
そこで黙んなくてもいいと思うんだけど…。
今回はここまで
それでは～♪

第5話　スパイ登場？（前書き）

はい！　ちょっと微妙なタイトルですが、前回よりはいいはずです。

ピカチュウ「～ですか？シリーズのことだな。ってか何だよ今回スパイ登場？って」

そのまんま。

ピカチュウ「またそれかよ前回のあとがきでも見たぞ」

それではどうぞ！

ピカチュウ「無視すんな！」

第5話　スパイ登場？

ジリリリリリ。

目覚まし時計がなった。

ピカチュウは手でとめる。

「はぁ～朝か～」

今日は日曜日、学校は休みなのである。ピカチュウは一階に降りて、テーブルの上にある朝食を食べ始めた。

「さて、今日は何をしようかな～」

ピカチュウは朝食を食べながら考えた。

「あっ！　母さんは今日仕事だから、お留守番頼むね～」

ピカチュウのお母さんはピカチュウにそういったので、ピカチュウは普通の声で「はーい」と答え朝食を食べ続けた。食べるのは本当に遅い。

ピカチュウの家はピカチュウとピカチュウのお父さんとお母さんしかいない。

すなわち、兄弟がいないことになる。正直に言うと、ピカチュウは兄弟が欲しいと思っていた。

どっかの作者は兄弟は要らないとかいってるし、なんだろうなーと思うこともあった。

「てゆーか日曜でも仕事があるってちょっと可哀相」

ピカチュウはそう思う今日この頃を過ごしていた。

「うーん。今日はどうしようかな～」

ピカチュウはひたすら考えた。しかし、やることはまったく思いつかなかった。

「しょうがないあいつのところにに行こう」

ピカチュウはこれからどこかに行くようだ。窓の戸締りをよく確認し鍵を閉めて家から出た。

ピカチュウは歩いて3分くらいのところにある空き地に来た。見ると、ダンボールがあった。

ピカチュウはなんのためらいもなくそのダンボールを持ち上げた。すると中に仮面ライダーみたいな格好をしたポケモンアギルダーがいた。

「フッよく俺がここにいたのが見破れたな」

「いや、お前がそこにいるのは随分前から知ってるから！　てかいい加減いる場所変えろよ！」

「……わかった変えておく」

アギルダーがピカチュウの突っ込みで少し落ち込んだ。

アギルダーはピカチュウが小3のときに空き地で同じように隠れているところを見つかってしまい、そんなこんなで友達になってしまった。まず、なんでダンボールをあけたのかピカチュウはまったく覚えていなかった。

小3のときは暇なときはここに来てよくアギルダーと遊んでいた。しかし、中学に入ってしばらくの間行く暇がないため今日久しぶりに会った。年はピカチュウと同じ中学1年生である。今では「本当にこんなことしてていいの？」と思うぐらいだ。

「それで今日は何して遊ぶのでござる？」

「ちょ、なんでござるつけた！　さっきはつけてなかったのに」

「いやぁ、忍者に憧れちゃって」

「憧れたってお前は伝説のスパイになるんじゃなかったのかよ！」

「！　……そうだ。俺は伝説のスパイになるんだったんだ」

アギルダーの夢……それは伝説のスパイになることだ。それはピカチュウのこの一言で生まれた夢である。

『君はスパイになったらいいかもしれないよ。色んな所に隠れられるしさぁ、ほかにも色々とできそうだし』

この言葉のお陰で今のアギルダーがいるのである。

「あっ！　ピカチュウだ」

そこに、ロコンとラティアスとリオルがいた。
「なんで一緒にいるの？」
ピカチュウがリオルに聞く。
「僕たちはピカチュウと遊ぼうと思って家に行ったら鍵が掛かってて さー」
「それでここまできたと」
「「「その通りでーす」」」
「何だこの不思議なテンションは」
ピカチュウは突っ込みながらも行き当たりばったりだと思った。
「それで、そっちの方……あれ？どっかいっちゃッた」
「問題ね。この空き地内にポケモンが僕以外にいます。どこにいるで……」
「そこのダンボールの中」
「……」
ピカチュウはリオルが波導を使えたことを忘れていた。
「頼む！　気づかなかったことにしてくれ！　そのまんま答え合わ

せしちゃったらあいつが可哀相過ぎるだろ」

ピカチュウが急に土下座をした。

「やだ」

そう答えたのは以外なラティアスだった。

「なんで！」

「だって、わかってるのにわからない振りをして逆にその子がわかっちゃったときにすごいがっかりしちゃうじゃん。しかもさぁ、そう思っちゃうとこんなこと二度とやらなくなっちゃうし、これを夢にしていたらできない無理だとか言って諦めちゃうじゃん」

「……」

そこにいた全員が黙り込んだ。そして、1分位してロコンが口を開いた。

「そうだよね黙ってるのは悪いモンね」

「そうだね」

ラティアスの言うことに誰も反対することはなかった。

「じゃあリオルがあけて」

ピカチュウがリオルを指名する。それを聞いたリオルはダンボールをあけた。中にはもちろん仮面ライダーみたいなポケモンアギルダ

ーがいた。
「フッよくわかったなこれでわかったのは二人目だ」
アギルダーがそういう。
「ごめんね。もうとっくにわかっていたんだ」
リオルがそういう。
「！　……スパイ諦めようかな～」
アギルダーがそう呟く。
「ほら、いじけちゃったじゃん」
「でも、今いってた方がよかったじゃん♪」
「……そうかもね」
ピカチュウがそう答える。
「アギルダーたとえ今ばれちゃってもいつかきっと伝説のスパイになれるって、もっと熱くなれよおおおおおおおおおお！」
ピカチュウが熱血漢に目覚めアギルダーに熱い心をぶつけた。
「はい！　先生俺は絶対に諦めません！」
「よし！　そのいきだ！　あの夕日に向かっていくぞ！」

「はい！　先生」

ピカチュウとアギルダーは夕日に向かって走っていった。

「何やってんだか」

「そうだね♪」

取り残された方たちは普通にピカチュウ達を止めたとさ。

～てなわけでまた空き地～

「かくれんぼしようぜ！」

ピカチュウが言う。中一になってもかくれんぼやるのかと思いながらも入らないと何が起きるのがわからなかったため仕方なく全員で入ることにした。

「じゃあピカチュウが鬼ね」

「何でだよ！」

ロコンがそういうのでピカチュウは突っ込んだが、ロコンは「よろしく～」といい、隠れてしまった。

「仕方ないな。い～ち、に～い、さぁ～ん……」

ピカチュウは仕方なく数を数えていった。そして長く「じゅ～う」といい、振り返ると当たり前だが誰もいなかった。とりあえず、目の前にあるダンボールを持ち上げてみた。中に絶対にいると思うからである。

しかし、いつもならここに隠れているアギルダーがここにいなかった。じゃあどこへ行ったのだろうか？……

～それから１０分後～

「あっリオルみーっけ！」

「くそ、ばれた」

リオルは少し悔しそうにしていた。ほかにもロコンとラティアスはもう見つかっていた。

「あとはアギルダーか」

そう。見つかってないのはあとアギルダーだけなのである。

「あいつどこにいったんだろうな～」

ピカチュウがそういう。

「タイムアーップそこまでだよ」

リオルが叫び終了の合図を出す。

このかくれんぼにはルールがあった。鬼は２０分以内に全員を見つけなくてはいけないというルールがあった。そしてそのルールが適用されて、かくれんぼが終わったというわけなのである。

「じゃあアギルダーでておいでー」

ピカチュウが叫ぶ。すると、壁の中から突然アギルダーが出てきた。

「スパイ忍法壁隠れの術でござる」

「ちょっと待った！　お前今スパイと忍者混ぜたよな？　何のために混ぜたの？ねぇ」

「スパイと忍者が好きだから」

「……もういいよ」

ピカチュウはとうとうあきれてしまったようだ。

そして時間を見ると、とっくに6時を過ぎていた。

「そういえばアギルダーの家ってどこにあるの？」

ピカチュウがそういう。

「家はこっちの方にある」

アギルダーはピカチュウの家のほうを指した。

「ていうか毎日ここで一人で遊んでるの？　友達は？」

リオルが少し控えながらも聞いた。

「いない。俺の周りに友達はいない。いるのはピカチュウと君たちだけだ」

「「え！？　何で友達がいないの？」」

今度はラティアスとロコンが同時に聞く。

「俺がこういうことをしてるから嫌われて近寄ってこなくなった。嫌われたばっかりのときはいじめに来る人がきてたから少しは退屈しのぎになった。でも、最後には誰も近寄らなくなったそして最後にはお化け扱いをされた。そしてそのころに友達になったのはピカチュウだったんだ」

「……そうだったのか」

ピカチュウがそういう。

「アギルダー」

「何？」

ピカチュウがアギルダーを呼ぶ。すると、地面に正座し始めた。

「ごめん僕が助けられなかったんだね。友達の僕がまったく助けられなかったんだね」

そういいながらピカチュウは土下座した涙も出ていた。すると、アギルダーはピカチュウに「顔を上げなよ」といってくれた。

「いいんだ俺はあの頃まったく夢がなかった。そしてスパイになるという夢ができたのはピカチュウのお陰だ。あの夢がなかったら今の俺はいなかったし、言ってくれなかったら俺は苦しみに毎日悩まされてたよ」

アギルダーはそういった。ピカチュウは「こんな僕を許してくれるの？」といい、アギルダーは「うん」と言った。

「感動の最中ごめんね。まず、ピカチュウ君はその件に関してはまったく関係がないと思うよー」

リオルが突っ込む。

「そんなこというなよおおおおおおおおおお！」

ピカチュウが叫んだ。

その後、ピカチュウとアギルダーは一緒に帰って行ったのとさ。

～そして翌日～

「今日は転入生が来るぞ～」

リザードンがだるそうにそういった。

「み、皆さん始めまして。アギルダーといいます。夢はスパイになることです。」

突如アギルダーが転入してきた。

「ちょっと待て。お前学校行ってないの！」

「うん！　ずっと休んでたよ」

アギルダーはさわやかにそういった。リザードンは「なんだピカチュウ知り合いか？」と欠伸をしながらそういった。

そんなこんなでまた1年4組に新しい仲間が増えたとさ。

第5話　スパイ登場？（後書き）

あ～なんかジュペッタ君に似た様なキャラができちまった……。
ジュペッタ「大丈夫だよきっと」
うわ！　ジュペッタいつの間に
ジュペッタ「空気化の力が上がってきたかな～」
そうじゃない？
ジュペッタ「うん！　そうだと思う」
じゃあ今回はここらで
それでは～♪
ジュペッタ「またね～」

第6話　もう一人の主人公（前書き）

はい！　今回は主人公が出ない話ですよ～。

ピカチュウ「もう一人の主人公って」

簡単にいうと、サブ主人公です。

ピカチュウ「突っ込みはどうすんだ」

突っ込みキャラは無しで。

ピカチュウ「じゃあもう一回聞くけど突っ込みはどうすんだ？」

さぁね♪

ピカチュウ「……」

ではどうぞ！

第6話　もう一人の主人公

キーンコーンカーンコーン……。

学校に授業終了のチャイムが鳴り響く。

「じゃあ今日はここまで」

1年6組の帰り学活のが終わった。生徒は担任であるオノノクスに向かいさよなら～といい、教室を出て行く。

6組のポケモンにまぎれて教室を出ていく一匹のポケモンがいた。

「ねぇイーブイ」

そのポケモンは全体的に茶色く、尻尾の先の部分は白いさらに頭にはとてもかわいらしい耳がついている。そのポケモンの名前はイーブイというらしい。

「何、ポッチャマ？」

その隣にいるのは色は青く、口にはくちばしがついているポケモンのペンギンである。

ポッチャマはイーブイと友達だ。

「今日は部活に行くの？」

「今日は生徒会長に呼び出されてるから」

ちなみに部活は二人とも卓球部だ。

「そっかじゃあ先に行ってるからな～」

「わかった」

二人はそれぞれ分かれ、ポッチャマは体育館へイーブイは生徒会室に向かった。

～生徒会室～

イーブイはゆっくりと歩きながら生徒会室に向かっていた。ちなみに役職は庶務だ。イーブイは何故生徒会をやろうと思ったのか……。気づくと、生徒会室についていた。そして中に入る。

「会長、どうしたんですか？」

イーブイが生徒会長であるミュウツーに真剣に聞いた。

「ん～、今日は生徒会で学校付近のゴミ集めの日なんだが……」

「俺一人じゃあ行きませんよ」

ミュウツーが言い終わる前にイーブイは話を断った。

入学式では、とても迫力のある生徒会長だったのだが今、ここにいるミュウツーはまるで別人のようにだらけている。

「あらあら、またイーブイ君に自分の仕事を押し付けてるんですか？」

そういうのは、生徒会書記で2年生のグタブンネだ。

「もちろんだ。タブンネ」

「ちょ……もちろんって」

イーブイが少し、ズコーとなりながらも言った。

「まぁそれが一年の仕事でしょ？」

そういうのは会計のグレイシアだ。もちろん2年生である。

「んじゃ頑張ってー」

ミュウツーがやる気がなさそうに言った。

「何でですか！　そこは全員でやるんじゃないんですか？」

イーブイが反抗する。

「皆やることがあるから」

「そんなことといったら僕だって同じですよね」

「そんなの知らん」

「知らんじゃないですよ」

そんなこんなで続けていたらあの人が来た。

「あ～ここは五月蝿いな～」

「おっ、お前が来るとは珍しいな」

「ちょっと聞いてくださいよガブリアス先輩！」

イーブイが助けを求める相手は生徒会副会長のガブリアスだ。ミュウツーとは幼馴染であるが、ミュウツーは3年生ガブリアスは2年生である。ガブリアスとイーブイは生徒会の自己紹介で知り合った。

「ん、なんだ？」

ガブリアスはいつもはこんな感じだがそばにいてくれるだけでとてつもなく心強いしとても後輩思いである。どっかの生徒会長とは違って。

イーブイは正直、来年に生徒会に入ってくれればよかったと思っている。

そしてこれがカントー私立ポケモン学園生徒会なのである。

「会長が自分の仕事を押し付けてくるんですよー」

イーブイが泣きついてきた。

「後輩は大切にしような会長」

「いや、こいつは後輩でもなんでもない」
ミュウツーはさらっと言った。
「酷い。酷すぎる」
イーブイは泣きながら走って、生徒会室から出て行った。
「ほらなこうなるから俺は止めたんだよ」
ガブリアスがミュウツーにそういう。
「わーったよ。じゃあ言ってくる」
ミュウツーはイーブイを追って生徒会室を出て行った。
「まったく、ミュウツー先輩が最初からあんなこと言わなかったらよかったんじゃないですかね〜」
グレイシアがそう呟く。
「しらねぇよただ、こんなこというほどイーブイに期待でも寄せてんじゃねぇの？」
ガブリアスがそういう。
「あ〜、だからいつもあんなことやってるんですね。『生徒会をやめてもらいたくないから』それでも今日はちょっとやりすぎちゃってましたね」

タブンネがそう考察を立てる。

「そうかも知れねぇな」

ガブリアスが欠伸をしながらそう呟く。

〜体育館〜

体育館ではポッチャマが卓球の練習に励んでいた。

「よし、その調子だ」

そういうのは卓球部のキャプテンのエテボースだ。特徴として尻尾は2つに分かれている。それをうまく使うことで数多くの大会を勝って来た強者である。

ポッチャマとイーブイはカントー学園卓球部の中でも期待のある新人だ。

「もう一回だ」

「はい！」

ポッチャマは大きく返事をした。

「あれ、イーブイ？」

ポッチャマは体育館の近くを歩いているイーブイを見かけた。

「先輩」

ポッチャマは先輩を呼ぶ。

「何だ？」

「すぐ戻ってくるんで少し開けていいですか？」

「ああ、いいが」

「ありがとうございます！」

そういい、ポッチャマは走って体育館を出ていった。

「イーブイ！」

ポッチャマは大きな声でイーブイを呼んだ。

「……なに？」

イーブイは小さい声で聞いた。
「どうしたんだよこんなところで」
ポッチャマはイーブイに聞く。
「それがねぇ……」
イーブイはここまでのいきさつを説明をした。
「ふーんでここまで来たと」
「……うん」
イーブイはまだションボリとしている。
「それはイーブイが逃げているだけだよ」
「えっ……」
「確かに先輩がそういうのは悪いと思うよ。だけど、それは『生徒会をやめてもらいたくないから』やってるだけだと僕は思うよ。だだ、今日はちょっとやりすぎちゃったようだけど」
ポッチャマはそう言った。聞いたのとほぼ同じ速さでイーブイは「じゃあもっと優しくしろよ」とおもった。
「まぁそれが先輩達の優しさなんじゃないのかな?」

ポッチャマの言葉を聞くと、イーブイも「あぁ～」と驚きながらも理解はしたようだ。

「それが正解なら早く謝りにいかないと……」

そういい、イーブイは走って生徒会室に戻っていった。

「さーてと、部活に戻るか」

ポッチャマはそういうと、体育館に戻っていった。

～そして生徒会室～

「ハァハァ……会長いますか？」

イーブイは息が荒いがガブリアスに聞いた。

「ん～今頃お前を探してるんじゃあねぇの～？」

ガブリアスは今にでも眠りそうな声で答えた。

「そうですかじゃあ探してきます！」

イーブイはそういうと、また走っていった。

「あいつあんな感じだったっけ？」

「さぁ？　誰かがこういうようにしたんじゃあないですか？」

タブンネがそう答えた。

「そいつがあいつの友達だったら、とてもいい奴と友達になったな。
んじゃ屋上で寝てくるから」

「ちょ……寝てくるってどういうこと！？」

「眠いから寝てくるんだよ」

ガブリアスがそう言い、眠りに屋上に向かった。

「まったくもうっ！」

しばらく経ったらグレイシアはガブリアスを追いかけた。

「……やれやれ全く」

タブンネも仕方なくガブリアスとグレイシアを追いかけた。

〜屋上〜

「ミュウツー会長！」

「……イーブイか？」

ミュウツーは入学式の時ような真剣な声でそういった。

「そうです」

イーブイもいつも声ではなく、真面目な声になっていた。

「さっきは……悪かったな」

ミュウツーは普通に謝る。

「いや、会長のせいではありません」

イーブイがそう言うと、ミュウツーは？と首をかしげた。

「俺も先輩の言うことも聞けずにずっとわがままばっかり言って先輩達に迷惑をかけてました。本当にすみませんでした」

イーブイはそういいながら頭を下げた。

「……」

ミュウツーは黙った。そして少しおいて話し始めた。

「いや俺の方が悪かった。お前がそうやって思ってたことも分かってやれなくて、俺がめんどくさいと思ったら直ぐにお前に俺の仕事を回しちゃって……」

「会長……」

イーブイは少し同情した。

「だけど、一つもやってないですけどね」

「……フフフ、アハハハ！」

「な、何がおかしいんですか？」

イーブイはミュウツーに聞く。

「確かにそうだったから」

ミュウツーがそういうとイーブイも「そうですね」といった。

「なぁ、イーブイ」

ミュウツーはイーブイを呼んだ。

「何ですか？」

それに対しイーブイはミュウツーに聞く。

「これからもよろしくな」

ミュウツーがそう言うと、イーブイは「はい！」と大きな声でいった。

「なんだよ、俺が出るまでもなかったじゃねぇか」

ガブリアスは屋上の入口付近で隠れていた。どうやら、イーブイの手助けをする準備をしてたようだ。流石後輩思いの先輩

「あっ！　いた」

「やっと追いつきましたよ」

そこにグレイシアとタブンネが屋上についた。

「げっ！」

ガブリアスは少しやばいと感じた。

「覚悟しなさいよこのサボリ副会長！」

「大丈夫ですよ。終わったあときちんと傷の手当てはしてあげますから」

タブンネは保健委員会に入っている。その中でも、手当てをするのがとても上手い。

「くそっ！　こうなったら砂嵐！」

ガブリアスは自分手を使い、砂嵐を起こした。

「グレイシアさん大丈夫ですか」
タブンネがグレイシアを気遣う。
「大丈夫に決まってるんじゃない！」
グレイシアは強気に答える。すると、突如砂嵐が収まった。そしてガブリアスが何かに縛らているよになっている。どうやらミュウツーのサイコキネシスのようだ。
「放せ！」
ガブリアスはあがくが、全く離れなるようすがない。
「会長ありがとうございます。」
タブンネはそういい、ガブリアスに近づいていく。
「やめてくれ！」
ガブリアスがそう叫ぶ。
「ふざけんな！　この馬鹿やろう！」
「ぎゃ〜〜〜」
ガブリアスの悲鳴が学校全体に響いた。
「……大丈夫かなこの生徒会」

イーブイはこの生徒会に少し不安を感じた。

第6話　もう一人の主人公（後書き）

はい！　第6話で4月編で最後です。
イーブイ「えぇ！」
イーブイが主人公の話でその月はおしまいという感じにしたいと思います。
イーブイ「ふーん」
じゃあ次から5月編突入です！
それでは～♪

第7話　体育祭にむけて……（前書き）

ピカチュウ「なんじゃこりゃあ！」

サブタイトル通りです。

「体育祭って5月位だったっけ？」

知らねぇ。

ピカチュウ「ですよね～」

それではどうぞ！

第7話　体育祭にむけて……

「これより、1年4組学級裁判を始めます」

リオルが裁判長になったようにそういい、学級裁判が始まった。

「では、被告前へ」

「やめろ！　放せっ！」

リオルがそう言うと、ピカチュウがジュペッタやアギルダーにつかまれ前に出された。

「僕が何をしたって言うんだよ！」

ピカチュウが裁判長であるリオルに聞く。

「何をって昨日のことを忘れたのか？」

「昨日のこと……」

ピカチュウは考え始めた。

「ねぇ何もしてないよね？」

「とぼけるな」

「とぼけてはいない！」

ピカチュウがそういうとリオルははぁーとため息をついた。

「じゃあ説明をしてあげるよでは最初に被害者の証言でも聞きましょうか」

リオルはそういうと、一匹のタマザラシが出てきた。

「タマザラシさん？」

ピカチュウは首をかしげた。どうやら、このタマザラシは同じ1年4組のようだ。

「それでは証言を」

リオルに言われ、タマザラシが証言を始めた。

「昨日の昼休みのことでした。私はいつものように1年4組で過ごしていたら急に私を上に飛ばしてしっぽか何かでお手玉のようなことをされました。」

タマザラシはそう発言した。

「僕そこまでしっぽは器用じゃないよ」

「うるさい。これ以上しゃべると、判決を下します」

「ひぃっ！」

リオルがそういうと、ピカチュウは恐怖を感じた。

「……では判決を言い渡します」

「ちょ、なんで！」

「だってひぃっ！って言ったじゃん」

「そうですね」

リオルは判決を下そうとする。

「判決は……」

リオルが判決を言い渡そうとした瞬間僕の意識は飛び、気がつくと自分のベットの上だった。

「……なんだ、夢か」

ピカチュウはそういうと大きく欠伸をし、ベッドから起き上がって一階に降りていった。

「あれは本当にただの夢だったのか……」

ピカチュウはそう考えながら学校へ向かってあるいていく。

「ふぅ～着いた」

ピカチュウは一息ついてから教室の中に入っていった。そこにはタマザラシがいた。

「あの～、タマザラシさん」

「なんですか？」

タマザラシは聞いた。

「あの、……ごめんなさい」

ピカチュウは謝った。それに対し、タマザラシは「なんのことですか？」と逆に聞くように答えた。

「え、……」

ピカチュウは黙り込んでしまった。

そのとき、チャイムが学校に鳴り響いた。

「あっ！　授業が始まっちゃうから……」

そういい、タマザラシは自分の席に戻った。ピカチュウも仕方なく自分の席に座った。

「おーす。朝のＨＲ始めるぞー」

リザードンがそう言いながら教室に入ってくる。

「今月の中頃に体育祭があるからな～」

「ちょっと待て！日付くらい……」

「それはまだ未定」

「なぜ！」

「校長の気分で決めてるから」

「そんなんでいいのかよ」

「それが現実」

ピカチュウがいくつも突っ込んでくるが、リザードンはあっさりとツッコミに答える。

「……」

ピカチュウもとうとう黙ってしまった。

「んじゃあ体育祭頑張れよ～一位になったらいいものが……」

「えっ！　何それおいしいの？」

そういうのはアギルダーだ。アギルダーもようやくクラスの一員となじめたようだ。

「それはしらん」

「なんで！」

「校長の気分」

「なんか同じ言葉が出てきたんですけど」

「知らん」

ピカチュウもとうとうお手上げ状態に陥ったようだ。

「まぁ楽しみにしとけ、それと、今日の学活はグランドに出て１００m走測るからな～」

リザードンがそういうと、運動が嫌いな人はえぇ～！とガックリし、運動ずきの人はよっしゃあ！と大喜びをする。

「そういえばさリオルって足早いの？」

ピカチュウがリオルに聞く。

「うーん……」

リオルは黙り込んで考えた。

「おそらくそれは人それぞれになると思う」

リオルがそういうと、ピカチュウは「それ、当たり前じゃん」とつっこんだ。

～グランド～

「んじゃ、出席番号順に走るぞー」

「なんだその態度は」

ピカチュウはそういう。見る限り全くやる気のないおっさんのようになっている。

「これが俺のやり方なんだよ」

リザードンらしいと思えばリザードンらしいといえる。

「じゃあ始るぞ」

リザードンがそういうと、アギルダーが3レーンにつき、今にでも走る感じがする。

ちなみにカントー学園のグランドは校長であるヤドランが中学時代、陸上部だったのでとてつもなくきれいになっている。
正直、オリンピックの会場にしてもいいくらいの場所なのだ。

「よーい……ドン！」

それを聞いた瞬間、アギルダーはものすごいスピードで走っていた。

「早すぎるだろ！　あいつ」

ピカチュウはアギルダーを少し見直した一瞬だった。

「まぁ種族値の問題かな～」

リオルはそう考察する。

「おーっと、ここで種族値について説明しておくぞ！種族値とは、各ポケモンごとに決められてる能力値のことだ。例えば、アギルダーの場合ご覧のとおり素早さの種族値が非常に高い。こいつのことを作者はイッシュ最速のポケモンと呼ぶほど早いと思ってるぞちなみにこれテストにでるからな」

リザードンが説明をしているうちにアギルダーは走り終わった。

「タイムは……１０秒３９！」

それを聞くと、アギルダーは悔いなしという顔をした。ほかの人は「すげぇ」とか「やべぇ」とか「これなら優勝は確実だ」とか言っている。

「早いな～」

リオルもびっくりしている。

「早速いいタイムが出たな。次は……」

こうして次々と1年４組の生徒が走っていく……そしてピカチュウの番が回ってきた。

「よし、いくぞ！」

「よーい……どん！」

「うおおおおおおお！」

ピカチュウは全速力で走った。

「タイムは……１５秒９９」

タイムはまぁまぁだったが、ピカチュウはそれなりに頑張ったとおもう。

「次はいよいよリオルの番だ」

ピカチュウは一番見たかったようだ。

「んじゃ行くぞよーい……」

リザードンがスタートの合図を顔が思いっきりに真剣になった。

「どん！」

リザードンがそういうと、すごい速度で走り始めた。

「早っ！」

ピカチュウは驚くが、アギルダーは「フッまだまだだな」と余裕の表情を見せる。すると、既にゴールしていた。

「タイムは……１０秒４５！」

「「あぁ～」」

そこに居たリオルとアギルダー以外は「惜しいなぁ～」と残念そうにいう。

「本当に惜しかったね」

「本当だよ」

リオルも少しがっかりしている。

そして、全員が走り終わり一番早いのはやっぱりアギルダーだった。その次にリオルが入った。ピカチュウは中間位である。

こうして、リオルたちの猛特訓への道が幕を開けたのである……。

第7話　体育祭にむけて……（後書き）

はい！　7話完です。
ピカチュウ「リオル早くね？」
早いね～僕なんて水泳だけが取り柄なのに……。
ピカチュウ「作者がたそがれた」
じゃあそれでは～♪
ピカチュウ「終わるのも早い」

第8話　もう一つの地獄（前書き）

はい！　ポケ夢の番外編が入ったのでカントー学園を更新するのも久しぶりですね。

ピカチュウ「まぁそういう兼ね合いだったから仕方がないと僕は思う」

そのとおりです。

ピカチュウ「そういう言い方やめろ」

はーい。

それと、今回はピカチュウ以外の視点もあります。

ピカチュウ「……えっ！」

それではどうぞ！

第8話　もう一つの地獄

～ｓｉｄｅロコン～

ここは１年４組の教室だ。いつもは教室は静かどころか大騒ぎが起きているくらいの元気さが出ているが、今は休み時間なのに１年４組から声がひとつも出ていない。そう、私は今日は一人のツッコミ王が休みだからこんな静かだと思う。

「ピカチュウ君今日は休みか～」

私はリオルがそう呟くのを聞いた。今は朝の学活を終えたばかりの休み時間が始まったばかりで、私は自分の席で一時間目の授業の準備をしていたところだった。私はクラスの中で正直のところを言うと、ピカチュウがこなくていいと思う生徒と何人かクラスの中にいると推測する。

「あぁ～そういや言い忘れてたことがあった」

リザードンが教室から出ようとしたとき、また戻ってきて教卓の前に立った。

「体育祭が終わったら、中間テストがあるから勉強しておけよ～」

リザードンがそういうと、４組にいた生徒は奇声やガックリした声が聞こえた。

「ねぇ、テストどうする？」

私はリオルに近づいて聞いた。

「うーん。リザードン先生なりに急に言ってくることは分かったけど、まさかこんなタイミングにくるとは思わなかったよ」

リオルはどうやらいつかこうなることは予想できたようだ。だけど、私の質問は普通にスルーしてる。

「こんなタイミング？」

私はそれを聞くと、首を傾げたつつリオルに聞いた。

「ツッコミ王が休みの日に言ってくると思う？」

「うん」

私は普通にそう答えるが、リオルはガクッとなった。

「先生絶対ピカチュウ君と言い合うのを楽しんでるんだと思うんだよね～」

「それで？」

私はもう一回聞いたが、またもやリオルはガクッとなった。

「い、意外と鈍いんだね」

「ううん。わかってたけど、ちょっと遊んでただけ」

私はそういうと、リオルは少し馬鹿だと自覚したのかなぜか勉強を

始めた。

「よほどショックだったのね……」

私は心の中でそう呟いた。

「それでさぁ、リオル君はテストどうする？」

私はリオルに聞いても、答えが帰ってこない……。これは謝らなきゃいけないと私は思った。

「リオル君、ごめんね♪」

「……いいよ」

「ありがとう！」

私はそう言うが、ここにピカチュウがいれば「ねぇ、なんで謝ってるのに最後に♪ついてるの？　しかもそれで許しちゃってるしそれでいいのかよ！」とかもろに突っ込んできたと思った。

「それと、テストのことね。今日あたりいろんな人を呼んで、家で勉強会しない？」

「あっ、それ賛成！」

私は快く受け入れた。

「それじゃあ、いろんな人誘おうか」

「うん！」

私はそういいながら頷き、別れていろんな人を誘った。

「じゃあ集合場所は、リオル君の家の前で」

「分かったそれじゃ」

～放課後～（ロコン→3人称）

「お待たせ～」

ロコンはリオルの家の前に来た。

「ねぇ、なんで僕までこなくちゃいけないの？　病人だよ」

そういうのは風邪で学校を休んでいたピカチュウだ。まだ5月だというのにマフラーをしている。

「ピカチュウは5月病だと思って」

「ちょっと、なんで5月病に掛からなきゃならないの？　これは単なる風邪だよ」

ピカチュウは5月病の存在を否定するように突っ込んだ。ピカチュウ以外にラティアス、アギルダー、ヒヒダルマ、タマザラシなどがいた。

「ちょ、省かれた人かわいそうだな」

ピカチュウはまた変なところに突っ込んだ。

「いらっしゃい！　とりあえず中に入ってよ」

「「「はーい！」」」

そこに居た人は大きくリオルに返事を返した。

～屋敷～

「いらっしゃいませ。今日はお友達がおおいですね」

「ごめんなさい」

リオルはアンナに謝った。

「まぁ、ご主人様達は本日ホウエン地方で行われている社内オリエンテーションに参加されていますので問題はありませんが」

「ちなみにリオル君のお父さんの職業はなんですか？」

タマザラシが聞く。

「株式会社フレンドの社長ですね」

「「あ、あの大会社の社長〜〜！」」

まわりにいた人は叫び驚くが、一匹だけ反応がなかった。

「別に親が社長なんてどうでもいいと思う。どうせ跡継ぎが自分になるとかいってるし」

「でも、フレンドの社長の跡継ぎはしたほうがいいと思うよ！」

ピカチュウはそういう。あれから風邪も良くはなってきたようだ。

株式会社フレンドとは、カントー地方を中心に各地方に支部を置いている大会社だ。

主に様々なポケモンのグッズを販売している。そしてなぜかバカ売れし、今では大会社として成り立っている。

「僕は自由に生きていきたいのに社長になったら自由にやっていけない」

「ちょ、そんな理由で！？」

ピカチュウはリオルの意見を批判しつつ突っ込んだ。

「そんな理由って言うな！」

リオルは強く否定した。

「……分かった。ごめん」

「うん」

ピカチュウはリオルに謝り、リオルはそれで許した。

「ねぇ、ほかの人が空気化してるよ」

ラティアスが突如入ってきた。空気化してた人はそうだそうだと便乗した。

「あ～！　もううるさい」

ピカチュウはうるさいと叫び始めた。

「じゃあそろそろ勉強会でもやりますか」

「「そーですね」」

「ちょっと待て！　なんでその答え方なんだよ！」

ピカチュウは最後の最後まで突っ込んだ。

そして、そこに居たメンバーだけではなく1年の全員はまだ知らなかった。

カントー市立ポケモン学園の定期テストの本当の恐怖を……。

そしてそれを知るのはテスト前日のことである。

第8話　もう一つの地獄（後書き）

はい！　今回は空気キャラが多いですね。

ピカチュウ「キャラ配分が全く出来てなかったな」

下手したらキャラ崩壊ｗｗ

ピカチュウ「おい！　そこで笑うな！」

今回はおしまいっ！

ピカチュウ「勝手に終わらせるな！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8480w/

カントー私立ポケモン学園

2011年11月25日23時47分発行